

北の河

高井有一



北の河

高井有一

文藝春秋

北の河

一九六六年三月二〇日 第一刷
一九七九年五月一五日 第七刷

八五〇円

著者 高井有一

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

※万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

目次

北の河	夏の日の影	霧の湧く谷	浅い眠りの夜
-----	-------	-------	--------

5	49	107	149
---	----	-----	-----

装
幀

丹
阿
弥
丹
波
子

北 の 河

北 の 河

東北に冬は早かった。昭和二十年、初めて雪が来た日の寒さを私は憶えている。短い日の落ち切る一時間余り前から降り始めた雪は、朝からの風に吹かれ、板葺の上に石を置いた家の屋根に落ちては舞うように見えた。しかしそれは長くは続かず、七時過ぎから雲に変わった。どの家も早くから雨戸を閉て切り、町の闇は殊更に深かった。

翌る朝は雨が尾を曳き、絶え間なく町を包むように降った。母の遺骸が町から離れた河下の洲に打上げられたと知らされたのは、朝九時頃である。

三日前の未明に、母は失踪した。朝早くまだ陽の差さぬ内に私は一度眼をさまし、この時、枕許の有明の光で母が牀にいないのを見たように思う。しかし私はまたそれから浅く眠った。再び眼を開いた時には、陽が雨戸のあらゆる隙、節穴から差込んで、朝は珍しく晴れているらしかった。その光の一条が母の牀の中央に落ち、それに促されるように私は急速に醒めて行っ

た。前夜母は確かに私と同じく牀に入ったが、朝の母の牀に人の寝た名残りは跡形もなかった。私は身を起して、長い間、敷布の隅すみまで気を配って整えたような母の牀を見ていた。

それから三日間の事を、私は正確に記憶していない。母が去って独り遺された十五歳の私には、周囲の人の関心が集り、彼等は口々に同情し、またあれこれと指図したが、それ等一切は私の外側を通り過ぎて行つた。「母さんが居なくなつたというに、愚図々々してばかりいて」と私は何度か言われたが、その時私の頭にあつたのは、誰もいない母の牀のかたちだけであつた。夜、私は必ず母の牀も並べて敷くのを怠らなかつた。そして朝、敷いた時の儘の空の牀を、半ばは予期しながらも矢張り失望とともに見出した。こうして待つより他、私には術がなかつたのである。

私と母が別棟の隠居所を借りて住んでいた大丸家の主人は、母の遺骸の発見を聞くと、上らぬ雨を案じつつ、私に現場へ行くための自転車を借りてくれ、また自分も同行しようと言つた。私たちは蓑を着けて家を出た。

母が身を投じた河は町を貫いて流れる。進むに従つて徐々に河幅を増し、町を過ぎて五里余の地点で他の一つの河と合し、新たな流れとなつて海へ下る。遺骸の上つたのは、その二つの河の合しようとする中洲で、其処は兩岸に山が迫つて流れは深く、各所に淵を造っている筈で

あった。雪の落ち始めた夕方、山から下って来た杣夫が、偶然洲に眼をやって母を見附けた。母は足を水に浸し、顔は洲の石の間に喰い込んでいたという。杣夫の知らせで近くの部落から何人もの人が出て、遺骸を洲の中央に引揚げ、雨の中を一晚かがりひ篝火を焚いて夜詰をしたそうであった。

河は、町を出外れると左手に見え始める。それは時に緩く彎曲していて、葉が既に概ね落ち切った浅い林の向う側に見え隠れした。右側の田の刈入れは全く終って、残された稲の切株が濡れて黒ずんで見える。稲架はきからも稲は外されて、組み上げた丸太たまだけが立っている。或る所では、農夫が畔へ出て何のためか太い杭を打込んでいた。其処までの距離は遠く、大きな木槌を打ち降すと、やや暫くあって鈍い音が空気を伝って来た。

五十分程過ぎて、濡れそびれた蓑が漸く肩に重く感じられ始めた頃、道は山峽へと入り、一つ崖の端を曲ると藁屋根の並ぶ小さな部落があった。其処からは部落の青年に案内され、竿で操る小さな舟に乗って河に出た。青年は黙ってやや下流の方を指し示した。流れが取り囲むように鋭い波を立てているのが、母のいる中洲であろう。黒い影が何人か動いていた。私は舳へきにいて、対岸の河を抱くようにして聳え立った山を見た。水面から三丈余は暗赤色の肌の崖となり、水はその下を抉って青緑色に流れていた。水面下で流れは更に深く蝕んでいるであろう。

山からは木を伐り出しているらしく、かなり深く繁った杉が此処彼処に倒されて乱雑に横腹を見せていた。舟は忽ち洲に着いた。人々は誰も一言も言わず、依然止まぬ糠雨の間をすかすように凝^じと私を見ていた。焚き尽された感じの篝火が白煙と僅かの焰をあげて、その傍に母がいた。遺骸は、上を覆うものもなく、俯伏せに、投げ出すように置かれていた。黒い服は今水から揚げられたばかりのように濡れて、瘦せた母の骨格まで露わにし、両手は頭に沿って垂直に伸びて、水に溺れる人が何かに縋ろうとする形に見えた。穿物はなく、右足は内側に向って奇妙な形に曲っていた。固く捲上げた髪だけは崩れず、項^{うなじ}の皮膚は白かった。これが母であった。

私たちが東北へ来たのは、四月の空襲で都会の家を焼かれ、父方の遠縁を頼ったのであった。父は二年前に死んで、母の手に遺されたのは家と若干の動産に過ぎなかったから、一夜の火で私たちはその半ばを喪った事になる。東北に着いた時は五月で、軒の深い所にはまだ固い残雪が地に貼り附いていた。それから再び雪を見る十一月まで半歳を僅かに越す期間に、私はさまざまな事を知ったように思う。この時代から現在まで二十年が過ぎている。しかし、それだけの時が過ぎて、私には東北の半歳が私に刻みつけたものが何であるのか、正確には判らない。ただ判るのは、体験が時間に洗われて、より鮮明に私の心に重く腰を据えている事だけである。

二十年の間に私は、母の死後私を引取ってくれた母方の祖父の死を始め、遺ったものの孤独を思い知る出来事に出会ったが、そういう経験の度毎に母の死で終った東北の生活の記憶が甦って、新しいものへ涙を流させなかった。こうした或いは人は強さと感じるかも知れぬ心の動きを、私は時に肌寒く思う事がある。

戦争の終りの日までは、私は何事にも気附かなかった。当時の私たちの年頃の者にとって、戦争は常に何処かで続けられているものであり、謂わばそれ自体が日常であって、戦争が終るという事は想像を超えていた。特に東北の町では直接火に追われる惧れは無く、生活は一応の安定を保っているように思われ、私は知らぬ間にそうした日々が無限に続いて行くのだと信じていた。しかし戦争は現実には終わった。そしてその直ぐ翌日の極めて些細な事から、それまでの錯誤が私に知らされ始めた。

八月十六日の昼過ぎ、私が学校から戻ると母は縁に出て、一面に「大東亜戦争茲に終了す」と大きく白抜きの文字のある新聞に眼を曝していた。母がそうして新聞を読むのは珍しくはなく、私は何気なく声をかけたが、母は振向かなかった。その日、学校の空気は異様であった。朝早く教場に來た教師は、「戦争に敗けてしまつて、今までの日本の国体はもう無いんだ。これでは支那の国体と何の変りがあるんだ」と叫んで^な哭き、生徒の半ば以上も同じように哭いた。

その後、どういう企図からか学校の裏手の山に駈足で登る事が課せられた。教師は私たちと共に走って、「敗けたんだ。口惜しいだろう。口惜しいだろう。これを忘れるなよ」と、息を切らせつつ繰返した。こうした事は私にとって何か新鮮に感じられ、私は一切を早く母に語りたかったが母は頑なに肩の辺りの固い線を守って、私の方を見ようとはしなかった。私が背に手を触れると、母は不意に新聞紙を手荒く畳み、私を突き退けるように立上って庭の敷石を音高く踏んで、裏の河に面した背戸の方へ殆ど走るように去った。私は追うのも忘れた。

更に二十日後、九月初旬の事である。私たちと同じく疎開して来ていた河内という友人が、都会に帰ると告げた。彼は父親を都会に残して母親と二人でこの町の親戚にいたが、戦争が終った以上、寒くならぬ裡に早く帰るのだと言った。輸送が混乱していて荷物を送れぬから、身柄だけ先に帰るのだとも言った。私は前から気易く友人を作り得る方ではなかった。東北の学校へ通うようになって半月位の間に河内と打ち解けたのは例外と言ってよかったかも知れない。六月、勤労奉仕で田植の手伝いに農家へ行かされた時の昼休みに、私たちは庭先に敷かれた筵に坐って話した。彼はこう言った。「親父から月に二回ずつ、きちんと手紙が来るよ。ぼくに向って書いているのは僅かで、殆どはおふくろ宛てさ。おふくろはそれを読んでもくれるけど、空襲や何かの事を書いてある所はわざと端折っちゃうんだ。ぼくに気遣わせまいと思っている

んだろうけど、でも本当を言えば、向うで空襲に追われてると、田舎でこんな事ばかりしているのと、何方がいいかよく判らないな」

私たちを結んでいたのは、このような種類の話であった。私はこの時、河内の指の爪の間に田の泥が黒く詰っていたのを、印象に残している。彼を失うのが私は惜しく、彼の帰る当日は駅まで送って行こうと約束し、その事を母に話した。母に言ったのは他意のない報告に過ぎなかったが、それを聞いた母の言葉が私を愕かせた。

「私も行くわ。一緒に送りに行きましょう」

河内は、母とは私の部屋を訪ねて来た時、簡単な挨拶をした事があるだけであった。しかし母は続けて言った。

「お見送りに行きましょう。何か記念にあげるものがあるといいけど」

河内の発つ日、残暑は厳しく、長く雨を見ぬ砂混りの道は白く乾き切っていた。町の西端にある駅を通っているのは貧しい支線である。蒸気機関車は黒い木造の客車三輛と貨車一輛を牽いて一日に五往復した。正午にそれに乗れば翌日の朝都会に着く筈であった。

私たちが行った時、河内は母親と既に来ていた。私が彼に声をかけるより、母の方が早かった。

「お帰りですってね。よかったわ」

そう言って何か小さな包を彼に手渡した。その包の中の物を私はまだ知らされていなかった。母は更に初対面の河内の母親に向い、

「長いこと、子供がお世話になりました」

と挨拶し、私にも何か言うように促した。しかし、其処には何かたくさん愉快でないものがあつた。私は黙っていた。河内の母親が言った。

「お宅でも、もうそろそろお引揚げで御座いましょう」

極く短い間、母は答えなかった。そして直ぐ笑って言った。

「はあ、そのようにしなくてはと思って、いろいろ考えて居ります」

私と河内とは話す事がなかった。強いて私は言った。

「汽車、もう直ぐ来るね」

「うん」

彼の声には屈託がなく、私は彼がこれから帰って行くところの雰囲気を知ったと思った。天蓋のない駅に陽は眩しく、私たちは皆汗を流した。

汽車が来た。河内たちは会釈し、素早く乗込んだ。車内は混んでいて、車室に入った彼等の